

秀賞

本の世界の広がり

福島県福島市立蓬萊中学校

1年 三瓶 れん

私が未来に向けて熱量を持っている挑戦は世界中の本を読むことです。

きっかけは、中学生になって、福島市へ来たことでした。私は、小学6年生のころまで、福島市ではなく、只見町というところに住んでいました。只見町は（失礼かもしれませんが）とても田舎で、近くに図書館や大きな本屋さんがありませんでした。あるのは学校の図書室と公民館の小さな図書室、そして学期ごとに来る移動図書館だけでした。

私はとにかく本が好きです。それは、小学1年生のころからで、休み時間には必ず図書室へ行き、帰ってからは雨が降っていようと自転車で公民館の図書室へ行き、移動図書館が来れば周りがドン引きするほど本を借り、風呂にまで本を持ちこむという生活をしていました。その生活のおかげか、学校の図書室の本と公民館の図書室の本は、ほぼ全て読んでしまいました。そのため私は、日本中とまではいえなくても、福島県中の本なら全て読んでいるのではないかという気になっていました。

でも、福島市に来て、私の見ていた本の世界はとても狭かったということに気がつきました。最初に見て驚いたのは、図書館の広さです。公民館の図書室が四つぐらい入りそうだったので、驚きました。そして、中学校の図書室が、小学校の図書室よりも2倍ぐらい広がったのにも驚かされました。図書室と図書館には、私が読んだことのない本がたくさん並んでいました。私はその本たちを見て、ここにある本を片っぱしから読んだら、次は世界中の本を読んでやる！ と決意したのです。

でも、中学生の生活は、小学校とは全く違いました。小学校のころは5分間だった休憩時間が10分間になり、本がたくさん読める！ と、私は思っていました。それなのに、前の授業の教科書の片付け、机の整理、次の授業の教科書準備、そして2分前学習があるのです。これでは、本を読む時間が少ししかとれません。移動教室となれば、読書時間はゼロになります。そして、放課後は部活動です。6時ぐらいに終わり、帰るとすぐに風呂に入ってお飯を食べます。すると、あっという間に午後8時になってしまうのです。さらに、学校に通っている以上、生徒の最大の敵である、宿題がついてきます。これを撃破すると、午後の8時30分。つまり、寝るための準備の時間を抜くと、読書の時間は約1時間半しか残っていません。私は、とても悲しくなりました。小学生のころは、

毎日少なくとも3時間は読めていたからです。それでも、読めないよりはまだいいと思い、楽しく読んでいました。

そしてある日、幸せなことが起こりました。それは、夏休みの2週間前。国語の授業を担当している先生からのお知らせでした。先生は、

「夏休みの1週間前は、本の貸し出し冊数が無制限になります。」とおっしゃったのです。これを聞いた私は、心の中で喜びの舞を舞いながら、学校司書の先生と国語の先生に感謝していました。しかし、その時の私は大切なことにまだ気がついていなかったのです。

頭の中で「絶対に借りてみせる本リスト」を完成させた私は、夏休み1週間前のお昼の放送を、わくわくしながら聞いていました。すると、衝撃の一言が聞こえてきたのです。それは、

「今週の図書当番は2班です。忘れずに活動しましょう。」というものでした。私は、図書委員です。そして、2班所属です。つまり、自分が本を借りることよりも、当番として貸し出しをすることを優先にしなければいけません。私は、その日の昼休みが終わる5分前「絶対に借りてみせる本リスト」の中にある大半の本があった新着図書の本棚が、ほぼ空になっているのを見て、完全に沈黙しました。しかし、ここで折れる私は私ではありません。負けずに、赤川次郎氏の本をごっそり借りました。そして、次こそはあれもこれも絶対に借りる！ と心に誓いました。

私は小学生のころ、「世界中の本を読むなんて普通に無理。」と言われたことがありました。たしかに、常識的に考えれば、無理なことかもしれない。でも、私は自分のことを（あまり良いことではないのかもしれませんが）常識外れな人間だと思っています。だからきっと、常識では考えられないこともできるはず。そしていつか堂々と、私は世界中の本を読みました！ と言えるようになってみせます。

私は只見町から福島市に来て、広い本の世界を知りました。だから、世界ではもっと広い本の世界を知ることができると思います。